経営者に聞く

株式会社 内山建設
代表取締役 内山 雅仁氏

うちやま　まさひと

1968年生まれ　54歳。 宮崎県日向市出身。
1990年、香川大学法学部卒業。同年、（株）三和銀行（現 三菱UFJ銀行）入行。
1996年、株式会社内山建設入社。
2003年、代表取締役就任、現在に至る。

座右の銘：**未来を予見する最大の近道は未来を自ら創造することである**

趣味：ジョギング、ゴルフ、クラシック鑑賞、美術館巡り

貴社の沿革をお聞かせください

内山：当社は、細島で木材関係の仕事に従事していた祖父が、1955年に土木業として創業しました。その後、２代目の父が1971年に法人化、1979年には株式会社に組織変更して現在に至っています。おかげさまで、昨年、設立50周年を迎えることができました。

事業承継の考えはなかったとお聞きしました

内山：長男である兄が「将来は自分が会社を継ぐ」と子供のころから言っていたため、次男である私には全く関係ないものだと思っていました。自宅の横に事務所があったので、土木の仕事を身近に感じてはいましたが、特別な関心はありませんでした。

大学進学も、家業を意識することなく法学部に進み、将来は商社に勤め海外で仕事がしたいと考えていました。就職活動をする中で、商社からもいくつか内定をいただきましたが、銀行に勤める大学の先輩から、銀行でも海外で活躍できるし、さまざまな経営者とも話ができると誘われ魅力を感じ、銀行に就職しました。

家業を継いだきっかけは何ですか

内山：最大の理由は、兄が東京での仕事

株式会社　内山建設

■本社所在地：宮崎県日向市大字富高 93-1
■ＴＥＬ：(0982)57-4833　■ＦＡＸ：(0982)57-4822　■ＵＲＬ：https://uchiyama-const.com/
■従業員数：40名　■創　業：1955年４月　■設　立：1971年７月
■事業内容：土木工事業、建築工事業
■都城営業所：宮崎県都城市下川東 1-6-5
■関連会社：有限会社 エコロ（園芸用土・資材の製造・販売）
宮崎県日向市東郷町大字山陰甲 12-16
株式会社 ひむか農園（へべす栽培：塩見園地、西川内園地）
宮崎県日向市大字富高 93-1

を続けることになったためです。

困惑した父から「会社を継いでくれないか」と懇願されましたが、最初は断りました。すると、「それなら会社を畳むしかない」と告げられ、ふと幼いころに会社の倉庫で遊んでもらったおじちゃん、おばちゃんたちの顔が浮かびました。

当社の外観

実はちょうどそのころ、銀行での仕事に疑問を感じていました。バブルの終焉を迎えた時期で、多くの経営者と関わって、人生を変えるようなダイナミックな仕事ができると考えていたにもかかわらず、全く逆のことが行われ始め、その最前線に自分がいることに悩んでいる時期でした。転職も考えていたタイミングでの父の言葉に、私の身勝手な判断で従業員を路頭に迷わせることはできないと考え、宮崎に戻って家業を継ぐことを決意しました。

入社後はいかがでしたか

内山：建設業に関する知識はほとんどありませんでしたので、入社当時は業界独特の慣習に戸惑いました。

閉鎖的な空気を変えたいとの思いで、オープンにできることは開示しようと、自社のホームページで工事内容や進捗状況を公開することにしました。父は、自身も以前からオフコンを使っての原価管理手法を導入するなど、新しいことへの挑戦を厭わない性格でしたので反対はされませんでしたが、慎重にやれよとアドバイスを受けました。

始めた当初は、同業者だけでなく発注者からも賛同いただけませんでしたし、社内でも反応が分かれましたが、今では当たり前になっていることを考えると、やってよかったかなと感じています。

こんなことができたのは、宮崎を離れていたということと、銀行員として多くの業界をみていたことで、建設業界を客観的にみられたからだと思います。

土木工事の様子

特徴と強みをお聞かせください

内山：入社した当時は、土木工事専業でしたが、社長に就任した翌年の2004年に建築工事業にも進出しました。

土木工事部門は、創業からの長い歴史

に裏打ちされた高い技術力と実績に定評があります。一方で建築工事部門は、発足から17年程の部門ではありますが、技術者の努力により順調に実績を積み上げており、現在は、土木と建築の割合がほぼ半々になりました。

先代の父がなによりも品質を重視し、工事の品質管理を徹底していましたので、その父の理念が受け継がれているのが当社の強みです。

建築工事の様子

また、別会社での展開ではありますが、新たな挑戦として、2003年に（有）エコロを設立し、スギ樹皮を活用した土壌改良材などの製造・販売を行っています。さらに、2019年に設立した（株）ひむか農園では、へべす栽培にも参入しました。

新規事業進出の経緯をお聞かせください

内山：新規事業進出に際しては、“本業とのかかわりのある事業であること”と“地域社会に貢献できること”の2つの基準を設けています。

スギ樹皮リサイクル事業は、法律の改正で林業者の負担が増した、木材生産の際に発生する樹皮の処分について相談を受けたのがきっかけです。法面工事の植生基盤材や農地などの土壌改良材として活用できることを知り、地域経済の活性化にもつながると考え、取引のあった有機肥料製造業者と共同で生産を始め、2009年からは（有）エコロ単独で製造・販売を行っています。

樹皮を活用した土壌改良材作り

へべすの栽培は、県のへべすのブランド化推進において、供給量不足がネックと聞き、地元の特産品であるへべす普及に貢献したいと考えました。また、圃場整備には本業の造成技術が活用でき、エコロの樹皮リサイクル事業との相乗効果も期待できることから参入を決めました。

へべすの苗の定植

人材育成についてはいかがですか

内山：当社の誇れることに、従業員の自主性が挙げられます。なかでも、従業員発案の若手社員勉強会と“Go To 現場”と題した現場視察勉強会は特筆ものです。

若手社員勉強会は、若手の技術者の卵を一人前にするための勉強会で、ベテラン技術者や外部講師が技術的な話や経験談を、失敗事例を含めて講義します。メニューも自分たちで考え、議事録まで作成し情報を共有します。ベテラン技術者も、若手の苦手分野が分かり、指導にも役立っていますし、自身の振り返りの機会にもなっているようです。

若手社員勉強会の様子

“Go To 現場”は、内部事務員に自分の会社がどんなことをしているのかを知ってもらい、現場担当者も自分の担当現場以外の状況をみることで改善点の発見や技術の底上げに繋がるように始めました。

この業界には、仕事は現場で経験し場数を踏んで覚えろとの風潮がありますが、人材不足が顕著である今の時代はそれだけでは十分ではありません。これらの取組みを始めて、見違えるほど成長した若手技術者もおり、効果を実感しています。

将来的には、従業員の家族にも参加してもらい、現場や仕事ぶりを見てもらいたいと考えています。

“Go To 現場”の１コマ

経営上の課題はありますか

内山：土木事業と建築事業は、似ているようで技術的にそれぞれ特有な部分があります。兼務が難しく、建築事業は歴史が浅い分、人材の層の薄さは否めません。人材が不足する部分は外部アドバイザーに意見を求め対応していますが、早期の人材育成の必要性を感じています。

今後の展望をお聞かせください

内山：建設業の醍醐味は、自分たちの仕事が形に残り、それを使う人々の喜びが自分の目で確かめられることです。今、情報化の弊害で、この『醍醐味』が現場から失われつつあります。今こそ私はアナログの感覚を敢えて大事にし、そして拡散していきたいと思っています。

聞き手：当研究所常務理事　爲山　高志
文責：当研究所主任研究員　黒木高一郎